

Hegel=Marx の労働把握とその射程

大野 精 三 郎

I

このノートは、Marx が 1844 年に書きたいわゆる『経済学・哲学手稿』のなかで主軸をしめる Hegel から継承した労働の一般的・哲学的把握を明らかにし、そのような労働把握が『資本論』とどのような関連をもつかについて、Herbert Marcuse の 2 つの論文「史的唯物論の基礎のための新源泉」(“Neue Quellen zur Grundlegung des Historischen Materialismus”, *Gesellschaft*, 2ter Band, 1932.) および「経済科学の労働概念の哲学的基礎」(“Über die philosophischen Grundlagen des wirtschaftswissenschaftlichen Arbeitsbegriff”, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 69 Band, 1932.) を手がかりとして問題を展望することにある。そして、このような労働の把握は労働の問題を経済の領域に限定し、労働を特定の経済活動として、また賃銀労働者の労働を、その典型と考える近代経済理論の労働把握といちぢるしい対照をなしているが、この対照もわれわれの問題のなかにふくまれるであろう。

Hegel=Marx の労働の一般的・哲学的把握が、最近、重要な問題のひとつとなっているのは、1930 年代に発見された『経済学・哲学手稿』および『ドイツ・イデオロギー』の完全な編集以来、マルクスの全著作を、それらのなかで発見された哲学的側面から改訂する試みがドイツ、フランスにおいて盛んにおこなわれるようになったからである。それらの試みに共通することは、初期 Marx、とくに『経済学・哲学手稿』のなかで展開された哲学的人間学ないしは Marx 主義のヒューマニズム的局面をもって、Marx 理論の完成とみ、はじめて唯物史観を公式化した『ドイツ・イデオロギー』を単なる論争書とみるばかりでなく、Marx の後期の著作を低く評価する傾向を生んでいるからである。この傾向は、Marx の主要著作『資本論』を、純粋に経済学的に解釈し、その哲学的関連を拒否している。私はここでは、これらの問題を考えてゆく手がかりとして、Hegel=Marx の労働把握をあとづけ、そのような労働把握がどのような射程をもつか、いいかえれば、それがマルクス経済学のなかでどのような地位をしめているか、『手稿』と『資本論』との相互関連を、この問題にかんするかぎりにおいて明ら

かにすることを目指している。

II

『手稿』を読むひとは、編集者の編別構成によって末尾におかれた Hegel 辨証法の批判が、とくに Hegel の労働把握の批判と継承とにもとづく労働および社会の本質理論が、古典派経済学の批判の主軸となっており、Marx の理論の基礎をなしていることを見逃さないであろう。Hegel は、労働をもって、他の動物から区別される人間固有の、しかも人間の特殊な実践行為であるとし、その本質を対象化においてとらえ、同時に、この対象化は、社会の内部でおこなわれると考えた。Hegel はいう「意識の純粋な対自存在(Fürsichsein)は、……おのれの外なる持続の境地に歩みいり」、「そこで同時に自分自身に帰えり、労働の対象に、**実体(Substanz)**であることを明らかにする」(*Phänomenologie des Geists*, WW II, S. 148 f. 金子武蔵訳『改訂精神現象学』上巻, 162 ページ以下)と。そして Hegel はこのような労働を、かれの哲学の基底にすえ、歴史の運動を人間存在の自己外在化、自己疎外としての自己対象化とこの疎外の揚棄、すなわちふたたび自己のなかにとりもどすことのなかにみている。しかし、Hegel においての人間存在は、最初から単に抽象的な自己意識=精神にほかならなかつたし、対象は、意識自体から、その外在化・疎外として措定されたにすぎなかった。Marx は、この誤りを正して、人間存在を自然的的存在として「対象的な、すなわち物質的な生命諸力を附与された生きた自然存在」(*Gesamtausgabe* I, Abt III, S. 159. 『マルクス・エンゲルス選集』補巻 4, 407 ページ)、すなわち「現実的な、感性的な諸対象にたいして対象的にふるまい、現実性的な感性的な諸対象においてだけかれの生命を発現できる」(O. a. S. S. 160, 邦訳 409 ページ)存在として捉え、また、対象化を全人間の歴史的・社会的労働における実践的・現実的な実現として捉え、対象性を、抽象的意識の対象化ではなく、現象的对象性として捉えた。しかし、Hegel における労働の本質把握——人間的存在はなによりも実践であり、自由な、しばしば前提される直接的な事実をうけいれ揚棄し変革する行為であり、そこで、人間が自己を確証する人間の本質として把握したこと——は Marx によって

継承され発展させられた。Marx というのは「労働は外在化のなかで、あるいは外在化された人間の対自化すること (Fürsichwerden des menschen), 人間の自己創生行為, あるいは自己对象的行為 (Selbsterzeugungsakt oder Selbstvergegenständlichungsakt des Menschen) である」(Marx-Engels-Gesamtausgabe, 1, Abtg III, S. 157 und 168. 『マルクス・エンゲルス選集』補巻 4, 404 および 420 ページ。)と。また『資本論』では「だから労働は, 諸使用価値の産みの母としては, 有用労働としては, 人間のすべての社会的形態から独立的なひとつの実存条件であり, 人間と自然とのあいだの質料転換を・かくて人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然である」(Das Kapital, Volksausg., ed. Kautsky Berlin, 1928. Bd. I, S. 10. 邦訳長谷部文雄訳『資本論』第 1 部, 上, 329—30 ページ, 青木書店版。)と。その他, 『資本論』のなかで展開されている媒介 (Vermittlung), 対象化 (Vergegenständlichung), 流動の形態から存在の形態への移行等々として把握されている労働の把握は, Hegel によって証明された労働概念の契機と同じであるといえよう。

Hegel=Marx の労働概念は, この素描においてもひとつの本質的特徴をもっていること, すなわち, ここでは労働は人間的定在の根本的できごととして, 人間の全存在を, 継続的, 恒久的に, 完全に支配する事象としてとらえられていること, しかも労働が人間の, 世界における存在のありかたとしての行為としてつかまれていることが注意されなければならない。労働によって人間ははじめて自己を対自化し, その定在の形態, その持続の形態を獲得し, ひとつになって世界を自分のものとするのである。労働はここでは, その対象の種類によっては規定されもしなければ, その目的, 内容, 成果等々によっても規定されず, 人間的定在自体, 労働において全体としておこるものによって規定されている。われわれは, さらにこの労働概念の萌芽のなかにあたえられた説明を追求しよう。労働のさしあたり明確となった性格は, 労働する行為の意味と機能との問題を, 世界における人間的事象のありかたにつれもどす。この事象自体が, それが行為, 実践であるかぎり明らかにされなければならない。というのはこの行為が, 労働概念の哲学的萌芽において, なによりまず強調されているからである。この点からみれば, 人間の事象は, 継続的な, **できごとをつくる (Geschehen-machen)** ものである。これに反して, 動物的定在の事象は単に**なりゆき任せ (Geschehen-lassen)** である。動物は, かれの定在を直接にひきおこす。たとえば, 動物は自分の巣をきずき, 外敵を防ぎ, 食物をさがすことをなしたとしても, すべてこれらの行為は動

物にあっては Wexberg の適切な表現にしたがえば, 生物学的に是認されるものである。動物は自己の定在を, かれの存在の仕方によってみたすような課題をもっていない。人間はかれ自身および直接に自分のものとなっていない世界の状況のなかにつねにおかれているのであって, かれの自己の定在を, この直接性にまかせることはできない。かれはこの状況を自分自身で**媒介**することによって, はじめてこの状況を自分のものとしなければならない, 媒介のこの過程は**生産および再生産**という概念によって特徴づけられるが(その概念は, Marx 以来, その根源的な本質的な意味をとりさられ, 経済部面にかぎられているが), 生産および再生産はけっして経済的意味における物質的定在のできごとだけを意味するのではなく, 全体としての人間定在の Geschehen-machen の仕方を意味するものといわなければならない。すなわち, そのあらゆる生活領域において定在全体の獲得, 揚棄, 形成および展開することを意味する。この行為は, 人間においては, 本質的に知的な行為である。この行為は, 人間の目的, すなわち, かれの定在とかれの世界をつくりだし, 発展させるという目的をもち, この目的に適合するための合目的な行為である。労働する行為は, 人間の他の・それと反対の行為, すなわち**遊び (Spiel)** からみれば, 3つの契機によって特徴づけられる。その行為の本質的な継続性において, またその本質的自立性 (Selbständigkeit) において, その本質的な負担的性格 (Last Charakter) において。第 1 の継続性は, 労働にさいして人間的定在にあたえられる課題は, 定在全体定在の方向と緊張とを継続的に労働にむけることを意味する, これに反して, **遊び**は, 継続性なく, 個別的なものである。われわれは労働としての生活について語ることはできるが, **遊び**としての生活について語ることはできない。第 2 の自立性は, 問題の歴史のなかで対象化 (Vergegenständlichung) の項目のもとにとりあつかわれている。労働は対象化する行為であり, 労働において人間的定在は自己を対象化する——それは現実的に存在する歴史的**客観性**となり, 世界の事象のなかで, 客観的実質を形成するとともに, 労働するものに自立性を, かれに世界におけるひとつ立場をつくりだす。第 3 に, 労働の負担的性格は, 労働の遂行のさいにおける一定の諸条件, 労働の社会的・技術的準備, 材料その他等々の抵抗に還元しようとするのは誤りであり, 労働は, それが人間的行為を, 外的に措定される法則のもとにおくかぎり, 負担として, **自己否定性**として把握されなければならない。

われわれは, 労働が人間全体の定在の在りかたに根拠をもっていること, それから生ずる労働の諸特徴をみた

が、さらにこの労働の性格の内容を検討し、その本質を明らかにしなければならない。

III

われわれはあらゆる労働が対象性(Gegenstandlichkeit)に関係することをみた。しかし、精神的労働、政治的行為、社会的サービス労働(芸術家、教育者等々の活動)を考えるならば、この関連はきわめて疑問であるように思われる。対象的であるということは、この研究の関連では、自己存在(Selbst-sein)の他者と考えられている。だから対象性はさしあたり自己の他者として考えられ、原理的には、自己にとっては、それ以外に存在するすべてのものが対象性である。労働によって、かかるものとしての対象性にならざるがごとし、そして労働するもの自身にならざるがごとし、対象は労働が加えられるまえには、材料物その他であったが、労働によってそれはいまや手もとにあり、利用できる対象、すなわち財となった。それはいまや人間的定在およびその歴史にたいしてまったく一定の具体的な関係におかれ、本来の仕方では蘇生させられた。対象の存在とできごととはもはや自然、物質の領域においておこなわれるのではなく、人間の歴史のなかでおこなわれるのである。この一見瑣事と思われる事態は労働が諸対象の実体(Substantialität)をなすという認識に到達するとき、重要となる。労働において、人間が対象の物性(Dinghaftigkeit)を揚棄し、そして対象をかれの生活領域において手段とする。かれは、対象に存在の形態をあたえ、諸対象を「人間の作品とかれの現実とする」。対象的世界は人間の現実であり、かれが労働の対象のなかに自己を実現すればするほど、かれはまた人間となる。だから、Marx はつぎのように、すなわち、労働の対象のなかで、人間は自己自身が対象的となり対自的となり、自分自身を対象として直観するという。「それ(対象化)は、かれが意識でのばあいと同じように知的にだけでなく、制作的、現実的にも自分を二重化し、したがって、かれによって作りだされた世界において自分自身を直観するからである」(Gesamtausgabe I. Abt. III, S. 89, 邦訳 308 ページ)。すなわち労働において人間は自分自身と自己の対象性を生産することができる。このより深い意味において(単に生物学的意味においてではなく)、つぎの一句、「人間は人間を生産する」、「人間的な生活は本来生産生活であり、生活を生産する生活」であるということが理解されるであろう。対象的世界が人間的対象化として把握されるならば、対象的世界はまた本質的に歴史的現実として規定される。人間の行為は、対象のなかに実現された歴史的な生活との対決である。対象的世界の過去を現在において揚棄すると

ころに、現実的人間とかれの世界とが成立するからである。「歴史は人間の真の自然史」であり、かれの「創生行為」であり、人間の、自己の労働による創生行為である。かくて人間が、労働することによって、歴史のまったく具体的な状況のなかにおかれ、「現実的に」、歴史的になるということは明らかとなったであろう。

このような対象化は人間の類的生活(Gattung Leben)の対象化である。というのは、労働において、孤立した個人が活動しているのでもなければ、労働の対象性は、孤立した個人による対象性でも、単なる個人の集合による対象性でもなく、労働において、特殊な人間的な普遍性が実現されているからである。対象化は本質的に「社会的活動」であり、対象化する人間は本質的に「社会的」な人間である。労働の対象領域は、共通の生活活動領域であり、労働の対象において、他の人間がその現実性において明らかとなってくる。あらゆる労働は、人間が相互にはじめて現実なものとなってあらわれてくる労働であり、ひとり人間が個人で従事する対象もまた「同時に他の人間にたいするかれ自身の定在であり、そしてかれにたいする他の人間の定在である。」(Gesamtausgabe 1, Abt. III, S. 115, 邦訳 343 ページ)である。

われわれは、労働を実践的・社会的・歴史的対象化によって具体化し、その本質を、動物から区別する人間的自由の——あたえられ、前提されたものを揚棄することができるかぎりでの自由の——現実的表現であることをみた。すなわち労働において人間は自由となり、労働対象のなかに自分自身を自由に実現することを。

IV

このように把握される労働は、自然的存在としての人間の特質から2つの部面にわかれる。ひとつは、物質的生産および再生産の領域(Bereich der materialen Produktion und Reproduktion)であり、他のひとつは、このような必然性のかなたにあるあらゆる労働、Marx の表現にしたがえば、自由の領域(Bereich der Freiheit)における労働である。前者、定在の逼迫(Not)にむけられる労働としての物質的生産および再生産は、後者の労働の——あらゆる定在の充実と完成の——条件をなしているが、それ自身欠陥をもち、定在全体からみれば、未完成なものであり、「自己目的」ではない。だが、定在はこの逼迫から免れるとき、はじめて自己の固有の可能性を展開させることができる。すなわち、必然性のかなたにある労働は、必然の領域に支配・制限されているが、同時にそれを完成する領域をかたちづいている。この労働によって、定在は自己に固有の・自由な可能性を、現実化し、充実することになる。この自由な実践にはお

のづから、社会的・歴史的な順位があたえられているのであって、個人の恣意によって決定されるのではない。Marx も、「人間は、自分自身の欲望にしたがって生産するだけではなく、《美の法則》にしたがって生産することができる」(S. 88, 邦訳 308 ページ)と強調している。そしてこのような2つの領域をもつことが人間的存在の特質であることを把握したうえで、社会分業の理論を媒介として、資本主義社会の批判または、古典派経済学の批判に進むわけであるが、ここまで述べてきたかぎりでの労働把握が経済理論内部でのそれと対照的であることをみておきたい。人間の欲望を、かれの行為の動機とし、その行為の目標を欲望の充足にみる経済諸理論は、経済の領域を絶対化し、人間定在の全体を、したがって労働の全事実をとらえることができない。また、経済の領域にかぎっても、これらの諸理論では、人間の欲望を、意識的・支配的な・指導的な目的追求性や関係の自由等々によって動物から区別するとしても、動物から区別される人間的存在を、動物と同一のディメンジョンにおいて自然的・有機的存在としてとらえ、歴史的存在としての、それに固有な実践である労働を捉らえてはいえないであろう。

V

最後にわれわれは社会的分業の問題に移ろう。われわれは、労働が社会内部でおこなわれること、したがって本質的に分業の一環としておこなわれていることをみた。このようないわば本質的な分業と歴史的な社会分業の一般的関連がここでとり扱うにすぎない。社会的分業は、これまで、支配(Herrschaft)と隷属(Knechtschaft)とのうえにきづかれてきた。そしてこのような社会的・経済的分業が実現されているところでは、被隷属の階級は、その社会全体の必要物そのものを配慮することにかぎられ、自由な領域へ入ることを切断されている。したがって物質的生産および再生産の労働は、それをはじめて完成する積極的な性質を失い、いまや物質的生産および再生産のみの実践に転化する。このような定在は自己を物化(Verdinglichen)する。これに反して、この領域を超えるディメンジョンの実践も、同様に、社会的な独占物としてあらわれ、あらゆる定在に、獲得することができ・獲得しなければならぬ自己本来の自由な可能性の実現としてはゆるされていない。この労働の2つの領域を結びつけること、すなわち、物質的生産および再生産を、それを完成する実践に転化することが、労働を疎外と物化とから解放し、その本質にしたがった労働——歴史的な世界における全人間の完全な自由の実現——を実現する条件となる。Marcuse は、このような労働の哲学的・

一般的把握が『資本論』の基礎になっていることを指摘しているがそれは当然の帰結であるといえよう。「自由の領域は事実上、窮迫と外的合目的性によって規定される労働がなくなるところで、はじめてはじまる。だからそれは事態の本性上、本来的な物質的生産の部面の彼岸に横たわる。……この領域内での自由は、ただ社会化された人間・結合した生産者たちが、自然とかれらの質料変換により、盲目的な力によってのごとくに支配される代りに、この質料変換を合理的に規制し、かれらの共同的統制のもとにおくという点——最少の力を充用して、かれらの人間性に最もふさわしく、最も適当な諸条件のもとでこの質料変換をおこなうという点に——のみありうる。…必然の領域の彼岸において自己目的としておこなわれる人間の力の発展が、真の自由の領域が——といってもかの必然の領域を基礎としてのみ開花しうる自由の領域が——はじまる」(Das Kapital, III, 2; Volksausg. ed. Kautsky, Berlin 1928, S. 316, 邦訳, 青木書店版, 第三部, 1155 ページ)。

VI

以上、われわれは Marcuse とともに、Hegel=Marx の労働把握の特質をみてきた。『経済学・哲学手稿』の発見の重要な寄与のひとつは、Hegel と Marx との関係を弁証法の転倒の関係に還元できると信じていた誤りを訂正し、「革命理論と Hegel 哲学との内的結合」を明らかにするところにあった。そして Hegel 批判は「国民経済学に先行する批判および基礎づけの付録ではなく、全批判の全体系および基礎のなかで働いている」(Neue Qullen, S. 174.)ことは明らかであろう。そしてこの主軸をなすものが Hegel の労働把握であったこともまた明らかとなったであろう。すなわち労働の本質を人間の歴史的・社会的・自由な実践として捉えることによって、疎外された経済社会の法則を明らかにするにすぎない古典派経済学の批判が可能となったこと、この労働の本質把握が『資本論』の基礎として働いていることもまた認められなければならない。しかし、Marx がこのような Hegel から継承した労働=社会の本質把握をもって、最近の諸研究が示すように、Marx 理論の完成とみることはできない。Marx のこの視点からする古典派批判は、批判の全内容をつくすものではない。労働の本質把握からする批判は、いわば古典派のよってたつ基礎にたいする批判であって、これによって資本主義社会の歴史性を明らかにする端緒を形成している。しかし他面、古典派の資本主義社会の分析の批判と成果の吸収、なかんずくりカード理論の克服が、『手稿』以後の Marx の課題となっていることを見逃してはならないであろう。